

恋人の薬師が見ている前で、
虎の街主に何度も犯される
発情した子産み体

体 験 版

1

第01話

「ここが、リーゲン」

門の内側は毛皮の匂いがした。獣人の街だ。

「遅かったな。手紙からふた月だぞ」

その声で肩の力が抜けた。トキだ。

「悪い。山で足止め食った」

「無事ならいい」

「心配したのか」

「したに決まってる。……顔、見せろ」

薬師の指が頬に触れた。冷たく乾いたトキの手だった。

「ここで暮らすんだろ。ふたりで」

「ああ。そのために来た」

笑った拍子に腹の奥がうずいた。抑制剤が切れかけている。

「トキ。……薬、もう保たない」

「客人の検めだけ済ませろ。出たらすぐ調合する」

「保つのかよ、それまで」

「保たせろ。お前ならできる」

広間には獣人も人間も集まっていた。壇の上に黒い縞の虎がいる。

「街主のグレン様だ。検めを受ければ客人になれる」

「形だけなんだろう」

トキが腕を引いた。その瞬間、虎の鼻先がひくついた。

「待て。その人間、発情してるな。子を産める体だ。カントボーイだろ」

「だったら何だってんだ」

「掟だ。発情した子産み体は、まず街主が検める。薬師、下がってろ」

「グレン様、彼は俺の連れです」

「連れでも掟は曲がらん」

グレンが壇を降りた。顎を掴まれ、ざらついた舌が首筋を舐め上げる。

「もう腰が逃げてる。期待してんのか、雌が」

「ちが……っ、誰がお前なんかに――」

下を膝まで剥かれた。前の合わせをくつろげられ、人前で子産みの口が晒される。

「ほら見ろ。まんこがもう濡れてる」

「やめ、ろ……っ、見せるな……っ」

「聞こえるか、この音。お前のまんこが鳴いてる」

太い指が二本、ぬぷりと沈む。ぐちゅ、と鳴った。

「あ……っ、お前が、こじ開けた、だけ……っ」

「こじ開けた指に吸いついてんのは、どこのまんこだ」

「し、らな……っ」

「素直になれよ。ここがいいんだろ」

指が中のいいところを押し上げる。俺の小さいちんちんが、しなって先走りを垂らした。

「ひ……っ、そこ、やだ……っ」

「やだって言いながら、ちんちんはとろとろだぞ」

「見、るな……っ、トキ、見るなよ……っ」

「街の連中、よく見とけ。人間の雌が、虎の指で鳴くぞ」

「ほんとに鳴いてやがる」

誰かが下卑た声で笑う。愛液が泡立って、内

腿を伝った。

「いい声だ。指でこれなら、啜え込んだらどうなる」

「啜え、な……っ、絶対に……っ」

奥の壁をぐっと押された。目の前で弾ける。
達した。指だけで。まんこがびくびく締めつけ、
とろみがどぷりと溢れた。

「一回で終わると思うなよ、メス」

「い、今いった、ばかり……っ、待——」

「待たねえ」

三本目がずちゅ、とねじ込まれる。爪を壇の
縁に立てた。

「太、い……っ、三本、むり……っ」

「むりじゃねえ。ほら、奥まで吸い込んでく」

「ぐ、う……っ、はいつて、く……っ♡」

「便所みてえに垂れ流して。街中にまき散らすか」

「だれ、が……っ、便所、だ……っ」

「お前だよ。掟の検めで雌に堕ちる、人間の便所だ」

「ち、がう……っ、俺は、トキの……っ」

「その名は、もう呼ばせねえ」

「グレン様。記録はもう取れたはずだ」

「薬師。こいつの番か」

「……まだ、違います」

「なら口を出すな。お前は今、誰の指でまんこ鳴かせてる」

三本の指がぐぷぐぷと奥をかき回す。つま先が床を離れた。

「あ……っ、また、出る……っ♡」

「何度でも出せ。それが検めだ」

二度目が弾けた。声も出た。甘ったれた、雌の声で。

「グレン様。これ以上は検めじゃない。ただの見世物だ」

「なら賭けるか、薬師。薬で止まればこいつ

はお前のもの。止まらなけりゃ俺の檻だ」

「マヒロを、放してくれ」

トキの、初めて聞く声だった。

「お前が、決めるな……っ」

「黙ってろ。三度目だ。メスの体は、もう俺
に堕ちかけてる」

三度目が弾けた。膝が床につく。それでも指
は止まらない。

「明日もここへ来い。檻の支度をしておく」

「マヒロ……っ」

トキの声が遠い。俺はその名を、返せなかつ
た。

2

第02話

目が覚めると、薬の匂いがした。

「起きたか」

「……ここ、お前の店か」

「俺の部屋だ。昨日のこと、覚えてるか」

「忘れたい」

「飲め。三日ぶんの抑制剤だ。これで発情は止まる」

「効くのかよ、それ」

「効く。賭けは俺が勝つ。お前を檻になんか入れさせない」

「飯は。なんか作れよ、薬師さん」

「お前が動けるようになってからだ」

「ふた月、毎晩お前の帰る道を計算してた。

山が荒れた日は眠れなかった」

「……バカかよ、お前」

「バカでいい。お前が無事ならな」

トキの指が髪を梳いた。昨日と同じ冷たい手だった。それで少し息がしやすくなる。

「お前のせいじゃない。掟と、あの虎のせいだ」

薬を飲み下した。喉の奥が苦い。昼前、館の使いが来た。

「街主が呼びだ。賭けの立会だとよ」

検めの間に評議会の獣人が三人。グレンは長

椅子に寝そべっている。

「来たな。薬は飲ませたか、薬師」

「飲ませました。発情はもう止まっています」

「なら確かめよう。触って濡れなけりゃ、こいつはお前のものだ」

「ふざけるな……っ、人前で何度も——」

「掟の立会だ。逃げ場はねえぞ」

「人間が街主に勝つところ、見てみたいものだな」

評議会の獣人が身を乗り出す。グレンが腰を抱き、下を剥いだ。子産みの口が、立会の前に晒される。

「脱がすな……っ、こんな、とこで……っ」

「ほら薬師。お前の薬、効いてるか確かめろ」
ざらつく舌が、まんこの縁をべろりと舐めた。

「ひ……っ、薬、飲んだのに……っ」

「薬で頭は冷えても、まんこは俺を覚えてる。
もう涎垂らしてるぞ」

「ちが……っ、それは――」

二本の指がぬぷりと沈む。ぐちゅ、と鳴った。
薬の上から、奥がうねって指を咥える。

「効いてねえな。立会の前で濡らす雌に、薬
なんざ無駄だ」

「むだ、じゃ……っ、効いて、る……っ」

「効いてりゃ、まんこがこんなに啜えるかよ」

「啜えて、な……っ♡」

「トキ……見るな、見るなって……っ」

トキの顔は、見られなかった。

「黙れ。一回いってみろ」

「い、かない……っ、こんなとこで……っ」

指が中の弱いところを叩く。ぱちゅ、ぱちゅ、
と愛液が跳ねた。

「あ……っ、そこ、やだ……っ」

息が詰まる。声が出ない。つま先が丸まって、
まんこが指を食い締めた。達した。声もなく。

「一回目だな。薬師の薬は、何分保った」

「……黙れ」

「お前が黙れ。賭けたのはそっちだろ」

トキの声が掠れていた。二度目の波がすぐ来る。

「あ……っ、また、来る……っ♡」

「薬の上からでも、雌は雌だ。二度でも三度でも垂らせ」

「だれ、が……っ、雌、なんか……っ」

「まんこついてりゃ雌だろ。立会もそう見てる」

「ちが……っ、俺は、男、だ……っ」

「男のまんこが、こんなに鳴くのか」

ぐぶぐぶと三本に増やされ、奥をかき回される。腰から下がしびれて立ってられない。

「逆ら、う……っ、絶対に……っ」

「口だけは元気だな。まんこはもう、啜えて離さねえくせに」

膝の裏をすくわれ、立会の真ん中で股を開かされる。

「見せ、もの……っ、すんな……っ」

「掟の検めだ。よく見せてやれ、人間の雌のいきっぷりを」

「ほう、人間でもここまで鳴くか」

二度目が弾けた。愛液がとろりと内腿を伝う。

評議会の誰かが喉を鳴らした。

「賭けは俺の勝ちだ、薬師。薬は効かなかった」

「……まだです。周期が落ちれば効きます。
次は止める」

「次があると思ってるのか」

「あります。虎の発情期がじき来る。そのときは、あなたが同じ立場だ」

「……ほう」

グレンの尻尾が、ぴたりと止まった。

「今のは、聞かなかったことにしてやる」

「聞いた顔してたぞ、街主様」

「黙れ。次の検めは明後日だ」

「二度と、来ねえからな」

「来る。掟だからな、人間」

トキの薬は、確かに頭を冷やしていた。冷えた頭で、俺は自分のまんこが指を欲しがって締まるのを、はっきりと感じていた。

3

第03話

「明後日じゃなかったのかよ」

「街主が前倒しにした。……俺は、立会を外された」

「外された、のか」

「人間が立ち会えるのは一度きりの掟だと。
昨日のが、その一度だ」

「じゃあ俺、ひとりで行くのか」

「耐えろ。鳴かなきゃ賭けはまだ続く。三日
で虎の発情期に入る。そこを突く」

「ひとりで平気か」

「平気だよ。たかが、検めだろ」

「……無理はするな。鳴いても、お前が悪い

わけじゃない」

「鳴かねえって言ってんだろ」

「……お前は、強いな」

「知ってる」

できる気がした。昨日は不意を突かれたただけだ。

だが連れていかれたのは検めの間じゃなかった。市の立つ広場の露台で、下には人が溢れている。

「ここで、やるのかよ」

「掟の検めは、街に見せて意味がある。今日は市の日だ」

「鳴かなきゃいいんだろ。薬師に言われたか」

「いいぜ。鳴かなかつたら、賭けは俺たちの
勝ちだ」

「勝ったらどうする」

「お前が二度と俺に触らない。約束しろ」

「鳴いたら、その首に俺の牙を入れる。番だ」

もう引けない。グレンが首筋に鼻を埋め、深く吸った。

「いい匂いだ。発情、抑えきれてねえな」

「黙って、やれよ」

濃い発情臭が鼻の奥へ流れ込む。むせ返る雄
の匂い。まんこの奥が、きゅうとうずいた。

「な、んだ、これ……っ」

「俺の発情臭だ。お前のまんこ、これに弱い。

もう垂れてきたぞ」

下を引き下ろされ、広場の衆目に子産みの口
を晒される。とろりと愛液が糸を引いた。

「やめ……っ、こんな下まで見えるとこで……っ」

「見せるんだよ。街の雌が、虎に貫かれると
こをな」

「街主が人間の番候補を連れてきたぞ」

「ほんとに貫かれてやがる」

「人間の雌、ええ声で鳴くのう」

「みる、な……っ、全員……っ」

下から下卑た声が飛ぶ。そそり立つ雄が、入口にあてがわれた。熱くて重い。先端だけで息が止まる。

「む、り……っ、そんな太いの……っ」

「むりじゃねえ。お前のまんこ、もう咥えにきてる」

「咥えて、な……っ、お前が、押し込んだ……っ」

ぐぷ、と先端が沈む。まんこの縁が限界まで広がり、ずちゅ、ずちゅ、と奥へ。

「ひ……っ、はいつて、くる……っ」

奥まで一息に貫かれた。広場がどよめく。なのに腰が逃げない。逃げるどころか、迎えにいつ

ていた。

「あ……っ、奥、すご……っ♡」

「ここがお前の一番奥だろ。覚えとけ、雌」

「し、らな……っ、そんな、とこ……っ」

「まんこは知ってる。奥が吸いついてくる」

「ちが、う……っ、あ……っ」

ぱちゅん、ぱちゅん、と肌のぶつかる音が広場に響く。

「やだ……見られて、るのに……っ、止まんな……っ」

「見られて締めつけてんのは、どこの雌だ」

「だ、まれ……っ、トキ、トキ……っ」

「いない男の名を呼ぶな。今お前を貫いてる
のは、俺だ」

涙がこぼれた。気持ちよくて、悔しくて。雄
の根元の瘤が、入口に引っかかりはじめる。

「な、んか、引っかか……っ」

「結びだ。虎のは抜けなくなる。たっぷり注
いでやるよ」

「ぬけ、ない……っ、やだ……っ」

「やだ……っ、中は、やめ……っ」

「もう自分から腰振ってるくせに、どの口が
言う」

一突きごとに奥を押し上げられ、自分から迎

えにいていた。みっともない、雌の声で。

「い、く……っ、また、いく……っ♡」

二度目が弾けた瞬間、奥で雄がふくらむ。熱い精液が、どぷどぷと注ぎ込まれた。

「ひ……っ、出てる……っ、なか、いっぱい……っ♡」

「街中が見たぞ。お前が誰に注がれた雌か」

「ちが……っ、俺は、トキの……っ」

「トキの名は、もう奥に注いで消した」

結びで栓をされ、精液が逃げ場なく奥を満たす。その熱に、三度目がすぐ来た。

「中に栓して、注ぎやがった。見ろよ」

「賭けは俺の勝ちだ。約束どおり、その首に
牙を――」

「ま、待て……っ」

「冗談だ。番にするのは、お前が自分から欲
しがってからにしてやる」

牙は、入らなかった。その代わりに、うなじ
へ歯型だけが、熱く残された。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。
選択も、関係も、そして――結果も。

知らないままで終わるか、
それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。

恋人の薬師が見ている前で、虎の街主に何度も犯される発情
した子産み体